価値あるロータリー活動を続けていくために

対談シリーズ 第3回

「親善と平和の確立に寄与する」ことを目指した、国際ロータリー。先の見えにくい社会の中で、どのような役割を必要とされているのか、国際ロータリー第2520地区ガバナーに就任した菅原裕典氏が各界の第一人者に聞いた。

㈱清月記(仙台市)社長室で

真に求められる震災復興活動を目指す

―― 2015-2016年度
国際ロータリー第2520地区
ガバナー　菅原裕典 氏

1960年仙台市生まれ。2001年から㈱清月記社長。7月1日から宮城、岩手県の第2520地区ガバナー

菅原　東日本大震災後、官民一体のプロジェクト「東日本大震災 鎮魂と追悼のモニュメント」を創られております。

武藤　今回の制作は、私のライフワークになると思います。私は世界で彫刻作りをしていますが、何よりも自分のふるさとが大惨事に見舞われたということ、そして同時に慰霊というものを、自分なりにもう一度整理しようという思いがあります。今回の制作は非常に責任のある仕事ですし、身が引き締まる思いです。

菅原　お引き受けされた経緯は。

武藤　仙台で東北楽天ゴールデンイーグルスの試合を見に行ったときに、鎮魂と追悼のモニュメント建立プロジェクト実行委員長の峯岸良慥氏らからこの話しをお聞きしたのがきっかけでした。私自身、何かやらなければいけないなと思っていましたので、皆さんからむしろ宿題を頂いたと思いました。イタリアに住んでいるということもありますが、正直、何をしたら良いのか分からなかった。慰霊碑という発想そのものもどうしたらよいのか、形をどうするかなど手探りでした。しかも永久に、例えば2000年は残るわけです。その膨大な時間の中で何を伝えるかということを考えないといけない。それは僕だけでなく実行委員会の皆さんとか、京都をはじめとした多くの支援の方々の考えを聞きながら、3・11は一体何だったのかという、全体像を伝えられるシンボルになれたらいいなと願っています。

菅原　バチカンのローマ法王公邸に置かれている武藤さんの彫刻は永久設置されていますので、今回の鎮魂碑もそうした膨大な時間を想定した上で制作するのですね。

武藤　僕自身、外国で暮らしていますので、3・11で世界中がどのようなインプレッションを受けたのか、良く分かるのです。日本は神を敬いながらうまく自然と共存してきたという非常に珍しい民族です。しかも施設ばかりでなく組織や考え方も含め技術的には世界一の防災対策を持っている。その日本ですらやられたのに、耐震対策が遅れている自分たちはどうなるのかと思っているのです。それが、今回の3・11に対する世界の認識です。

菅原　仙台で開かれた国連防災会議が世界から注目されたのも、そうした背景があったのですね。

武藤　日本は経済大国なのに膨大な義援金が集まりました。大事なことは、集まった義援金は世界からの思い、だということです。そこを被災国である日本が理解しないといけない。思いは「愛」です。多くの愛を頂いたということを、後世に伝えなければいけないというのが、大きなコンセプトになると思うのです。

菅原　経済大国日本に使ってほしいと送ってくるお金の価値というのは、確かに意味は違います。その思いが、モニュメントとして残っていくことが素晴らしいことですね。

武藤　小さな実行委員会の思いを大きな思いとして伝えることが、お金以上のものを生んでいく。そして、バチカンはじめフランス、インド、アメリカなどに永久設置した風の環モニュメント同士を、大きな心で繋ぎあうアンテナ的なものを組み込んで、未来に繋げたいと思っています。

菅原　制作はいかがですか。

武藤　この10月から制作を開始、2016年11月末に完成、日本に運び込み、宮城県の夢メッセに仮置予定があります。将来的には、震災慰霊公園、メモリアルパークが建設された場合に、設置や委譲を行政機関に委ねるという形で進めたいと、実行委員会から聞いています。

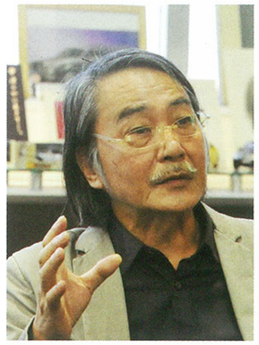
菅原　大津波で壊滅的打撃を受けた、日本古来の石の町、硯の町として石文化を伝えてきた宮城県石巻市雄勝町で、先生の母校、南材木町小学校の子どもたちと一緒に雄勝硯石制作体験活動に携わっていますね。

武藤　雄勝町の硯石職人さん協力のもと、雄勝の硯石を使って彫刻刀で自分だけのマイ硯石を作る活動です。雄勝石の復興はもちろん、子どもたちと一緒に日本文化再興ということを考えることができる活動にしたいと思っています。

菅原　震災復興で重要なことは、雇用の場を創り出すことだと思います。先生の活動を通じ、日本の伝統文化の再興を目指しながら、同時に雇用の場を創出するヒントになれば素晴らしいですね。先日、ガバナー就任あいさつで白石北ロータリークラブ(以下RC)にお邪魔した際、お土産として白石和紙を使った名刺入れを頂いたのですが、白石和紙を作る職人さんが数少なくなっていると聞きました。

武藤　復興のコンセプトは雄勝硯石や長野の真田一族が伝えたとされる白石和紙など、日本の伝統文化だと思っています。世界中で、伝統文化を受け継ぐ職人や技術者、スペシャリストがいなくなっています。ですから、被災地に世界中から伝統職人たちを集め、日本伝統とコラボしながら、被災地と世界の技術者を復興させるきっかけ作りを行いたい。

菅原　日本のRC数は、2012年5月末で2292、会員数8万9228人。私が7月1日から1年間ガバナーを務めている第2520地区は、岩手県と宮城県がエリアで79クラブ、約2300人がメンバーです。ただ組織が単年度ですので、日本にRCができて100年になる2020年に向け、しっかりした継続的な戦略計画が必要です。先生の戦略的なお考えは非常に参考になりました。RC会員一丸となり真の復興に向けた活動を進めます。本日は、大変ありがとうございました。



3.11への世界からの思いを伝えたい

―― 彫刻家・画家　武藤順九 氏

1950年仙台市生まれ。仙台二高から東京芸術大学美術学部卒業後フランス、スペインに渡る。75年からイタリア・ローマと彫刻の町ピエトロサンタにアトリエを構え、大理石の彫刻を中心に象徴的なテーマの彫刻を制作している。1997年のヴェルシリア賞国際グランプリ受賞作品「風の環(わ)、PAX2000」が、2000年7月25日、バチカンカステル・ガンドルフォにあるローマ法王公邸内に史上初めて抽象彫刻が永久設置される。みやぎ絆大使。

武藤順九氏が制作に入っている「東日本大震災鎮魂と追悼のモニュメント」のイメージ

※風の環 3.11絆プロジェクトとは
2013年3月1日仙台市で、村井宮城県知事、亀山石巻市長、その他賛同者の出席のもと、「東日本大震災鎮魂と追悼のモニュメント建立プロジェクト」が立ち上がる。仙台市出身の世界的彫刻家・画家でみやぎ絆大使の武藤順九氏にモニュメント制作を依頼した。同氏の世界で展開される「風の環プロジェクト」を支援してきた一般社団法人「風の環」は、氏の日本における芸術活動の拠点、京都でモニュメント建立プロジェクトを支援、思いを広げるための「風の環　3.11絆プロジェクト」を立ち上げ、被災地仙台と京都の2カ所で、全国に向けて募金活動を行っている。